
Resistance for Gear

黒眼鏡2号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e s i s t a n c e f o r G e a r

【Nコード】

N 6 9 8 9 Y

【作者名】

黒眼鏡2号

【あらすじ】

この星のほぼ中央に位置する大陸を領土とするギルディック王国この国は今、覇権争いによって内紛状態にある。

機械工学が発達した王国では、たくさんの兵器のよって日々大勢の死者が出ている。

王の双子の息子の兄、リドル率いる王国軍は首都防衛に力を注いでいたが、その隙に弟のランゼル率いる反乱軍は周りの町、都市、小さな村までも味方とし、首都に向けての進軍を開始。

すんでのところで進軍を抑えた国王軍だったが、新たな攻撃に警戒

し、反乱軍もこれ以降攻撃の手を休め、王国を南北に二分したまま膠着状態となってしまうた。

王国側（北陣営）の小さな村で生まれた主人公「ユート・ギアハーツ」は、幼いころから両親を亡くしていたが、幼馴染の「レイリア・ミロル」とその家族と幸せな日々を送っていた。

しかし彼は、自分の才能によって大切な人を傷つけてしまう。

そしてその才能ゆえに、戦争に巻き込まれてしまう。

怒り、悲しみ、迷い、思い出・・・

自分の才能に憤りを感じながら彼は生きる。

そして、真実を見つけた時

彼は

力を手にする

ブローグ

「待つてよ!」

「ほら、早く早く!」

「おい、あんまり急ぐと転ぶぞ!」

「わかつてるよ、パパ!」

「つ、つかれた・・・」

・・・楽しい思い出。

みんなでピクニック。

町が見渡せる小高い丘上の草原。

花がいっぱい咲いてて、

みんな楽しそうだ。

頂上についたら、みんな休憩。

ご飯を食べたらおじさんはすぐ眠っちゃった。

だからおじさんと遊べないというレイリアの不満の矛先が僕に向けられた。

無理やり引つ張っていかれた。

かけっこ、鬼ごっこ、かくれんぼ、花を摘んで冠を作ったり。

それをおばさんが笑って見てる。

おじさんも起きてきた。そのあとはみんなで日が暮れるまで一緒に遊んで・・・

「ただそれだけでよかったのに・・・」

一人ベッドの上で呟いてみる。

思い出も何もかもみんな、あの日に壊れてしまった。いや、壊してしまったんだ。

僕の手で

プロローグ（後書き）

書いてみたくて書いてみました。自分の思った通りに終われるように頑張ります。

s t a r t

「明日、初めて僕も戦場に行くんだ」

「・・・は・・・」

「リリーにはどうしても伝えなきゃと思って」

「・・・と・・・」

「あ、でも兵士としてじゃないよ？整備士としてだから安心して」

「パパとママは・・・」

「（あいつら）は僕じゃないと整備できないからね」

「パパとママはどこな」

「・・・ほんとは戦争なんかあっていいものじゃないけど、
やっぱり大切な人や物が傷つくのは」

「パパとママはどこな」

「・・・」

病院の個室のベッドで同じことを何度も繰り返している姿を見るたび、とてつもない罪悪感と虚無感が襲いかかる。

レイリア（僕はリリーと呼んでいる）は僕と同じ年、16だ。10年前のあの日から心を閉ざしている。

あの日に、リリーとリリーの両親でピクニックに行った先で僕たちは爆発事故に巻き込まれた。

リリーの父親はほぼ即死。

母親はリリーを守ろうと彼女に覆いかぶさって死んだ。

僕は離れたところにいたため奇跡的に無傷だったらしい。

でもリリーは・・・

「パパとママはどこな」

外傷はなかったが精神的なショックで心を閉ざしてしまった。そしていつも両親の面影を探している・・・

「そろそろ面会時刻を過ぎますので・・・」

「はい。・・・それじゃバイバイ、リリー・・・」

看護婦さんに言われ病室を後にした。

病院を出るとすぐに車が目の前に止まり、その主が話しかけてきた。

「よう、ユート。またお見舞いか？おまえもマメだな」

「その言い方だと悪意を感じる」

「寮に戻るんだろ？乗せてくぜ？」

「無視か。まあいい頼む」

—こいつの名前は「ロクスリア・グロツツ」

みんなロックと呼ぶ。

僕の同僚、同い年、戦闘部隊、第二中隊に所属している—

「いよいよ明日、だな。浮かれてヘマすんなよ？」

「僕のセリフだ。というか僕は戦闘には直接参加しない。わかってるだろ」

「ちえ、せつかく気分盛り上げようと思ったのによお」

—王国軍は大きく分けて三種類の部隊で構成されている。

戦闘部隊、補給部隊、そして技術開発部隊。

技術開発部隊以外はさらに三つの中隊に分けられ、役割もそれぞれにある—

「しかし、お前もすげえよな。最年少で技術部（技術開発部隊の略称）に入るなんてよお。」

「人殺し兵器を作つてすごい、つて言いたいのか？」
ちよつとひねくれたことを言つてみる。

「あ、い．．．いや、そういうことじゃなくてよお、．．あの．．あれだ．．その．．．．．」

「冗談だよ。そんなに真に受けなくてもいいよ。」

なんだかんだで長い付き合いだ。こいつのことはたいがいわかる。冗談を言うが、冗談を真に受け、そして調子の良いようで、繊細でもある。まあ、早い話、いいやつだ。

「そうか．．．．．。そんならいいんだけどよ。」

「ああ．．．」

車を走らせて数分。まだ時間がかかりそうだ。外の風景を見てぼんやりしていると、ロックが呟いた

「でも、やっぱお前はすげえよ。」

「何がだ」

「いや、さっきの続きになつちまうんだが．．いいか？」

「いいけど？」

「国王軍の負傷者が少なくなったのもお前のおかげだよ。お前の作った兵器．．．じゃなかった、技術があつたから明日の前線押し出しの作戦が立案されたんだ」

「．．．．．」

「それだけじゃねえ。お前の作った兵．．．技術で俺たちも幾分楽になつたしよお。」

― ロックのいる戦闘部隊第二中隊は主に技術開発部隊で作られる機械兵器を使う機械兵となつている。

他に第一部隊は第一中隊が装甲部隊、第三中隊が歩兵部隊となつている―

「でも人殺しには違いない。」

「……」

「たぶん僕がこの国で一番人を殺してるんだろっな……」

「そんなこと言うなよ……」

ロックがさびしそうに言う。

「それでも俺たち、戦闘部隊は生き残ってる。そのことにはほんとに感謝してるんだぜ？」

「でも僕は「それに」

僕の言葉をさえぎるように続ける。

「相手だってよお、兵器を見ただけでビビって逃げるやつもいるんだぜ？そう考えればお前はあっち側の兵士を救ってるって考え方もできねえか？」

「……それもそうだな」

「だろお！？」

「敵の兵士も救ってます！！、なんて言った上官の前で言ったらへたすりゃ銃殺刑だな。僕ら二人とも」

「そ……それは勘弁してくれ……」

「ハハッ」

寮に入ってから、すぐに寝た。ロックのおかげでずいぶん気が楽になった。あくまで少しだけ。

あとはリリーがよくなってくれば……

そのまま僕は深い眠りについだらしい……………

朝は早めに起きた。というより目が覚めた。

やはり緊張するものらしい。

「まあ、お遊び気分で戦場行くバカはいないだろうけど」
……ロツクの顔が浮かんだ。

顔を洗い、身支度を整え、工場に向かう。

入口では「あれ」を運ぶ準備ができている。

その様子を眺めていると突然背中に衝撃と痛みが走った。

「よお！起きたかボウズ！！」

「ゲンさん！」

―この2m級もあろうかという巨大なご老人の名前は「ゲンブルス・ラルドス」

みんな親しみを込めて「ゲンさん」と呼ぶ

この工場の又シみたいな人だ。初めてここに来た時はすごくお世話になった―

「とうとうこの日だな！！ついに来たぞ！！！！我々技術部の血と涙の結晶、そしてこの戦線に名を残すであろうこの新兵器のお披露目だ！！！！」

「そう……………ですね……………」

いい人なんだが、朝からこの声量はきついものがある。そして背中を叩いてくるのもさつきから痛いからやめてほしい。

「ついにやったな。ボウズ」

「・・・ハイ」

「お前さんもこんなに立派になって、さぞかしご両親も天国で誇りに思っちよる！」

「・・・あの、ゲンさ」ところで・・・あのお嬢ちゃんは元気かい？」

「・・・！・・・」

「・・・まだ治らんのか・・・」

「ハイ・・・」

「そうか、早く元気になるといいのお！」

「・・・あの、ゲンさん」

「ん？」

「ゲンさんはこの仕事辛いつて思ったことはないですか？」

「いんや？ここで仕事してくるとここに愛着がわいてきてな。歯車の一つでさえいとおしく思えてくる。そんなワシの技術がこの国の役に立つんじやったらこれほどうれしいものはないわい。」

「・・・そうですか」

「・・・また悩んどるようじゃな。」

「・・・」

「まあ、それもお前さんらしいがな・・・。そうじゃいいことを教えてやろう。」

「？」

「なにか・・・自分で大きいことをしでかそうと思ったとき、一番大切なのはタイミングじゃ」

「タイミング・・・」

「そう、自分の力、布陣、決意、その他もろもろすべてが集まり、相手が弱体化した時こそ絶好のチャンスじゃ。覚えておくがいい。」

「・・・はい・・・」

話してるうちに運び終わったようだ

「今日この日より！！戦闘は激化をたどるだろう……。だがしかし我々は絶対に勝てる！！この王国にふさわしき王、そして兵力、技術力、国民。この国のすべてが今我々に力を与え、血肉となりて戦場を駆け抜け！時に！我々を鼓舞する歌となり、刃となりて敵を打つ！我々の持てる力すべてをこの戦いの集中させよ。そして！栄光を我々がリドル王に捧げよ！！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

兵士たちが一斉にこぶしを上げて叫ぶ。
もうすぐ進軍が始まる。

それと同時に僕の鼓動もだんだん上がってきた。

「これが終われば……きつと昔みたいに……戻れるよね。リリ」

リリーの病気とこの戦争の終結は結びつくものではない。けどそう
思えば楽になると思って・・・・・・

「ゆくぞおお……！」

進軍が始まった。

まずはここからだ。

「行こう……ゼロ……」

s t a r t (後書き)

ゲンさんの口調が所々変わったりしてるかもしれませんがお気になさらず。これだけの長文で力を使い果たしそうな素人の黒眼鏡でした。ゼロが何なのかは次回。

Operation (前書き)

反乱軍の肝である工業地帯

この一番戦闘の激しい前線に立ち向かうため

国王軍はその町が見える山のふもと付近で夜営しているが・・・
技術部だというのにユートは先頭の部隊の近くにいた。

布をかぶせた大きなモノと一緒に。

Operation

「技術開発部隊、名誉主任、ユート・ギアハーツ!!!」

「は、はい!」

どうもこの人の声は慣れない。何度聞いても足がすくむ感覚だ。ちなみに、演説をしていたのもこの人だ。

――戦闘部隊 総隊長 「ガレル・ジクロム」

今回の戦闘の総指揮をとってもいる――

「アレの用意はできたか!」

こんな時間になんだと思えばやはりそれか。

「はっ! もうしばらくで最終調整が終わります!」

「頼んだぞ! 此度の作戦の勝利は貴殿にゆだねられている! 調整を怠るな!」

・・・プレッシャーになることを言わないでほしい。

「返事は!」

「はっ! 必ずや勝利をリドル王に!」

そんなことほとんど思っていないが

「うむ! 明日は期待しておる! そろそろ休め!」

そう言っただけで行った・・・。

名誉主任なんて呼ばれるのは久しぶりだ。

小さいころからおじさんに連れられて工場によく行っていた。

そのおかげで、工場に配属されたばかりのころも、ゲンさんたちによくしてもらった。

うん。みんないい人たちだ。

昔のことを考えながらテントでウトウトしていると、周りが騒がしいことに気がついた。テントから出てみると兵士が右往左往して、すぐくあわてているようだ。何があったか近場の兵士に訊こうとした瞬間。

「夜襲だーーーーー!!!!!!」

夜襲。その声の持ち主は確かにそう言った。どうということだ？ 作戦がバレたのか？

訳も分からずオロオロしていると、ガレル総隊長がやってきた。

「静まれ」

そう言うのと自然と静かになった。総隊長はこんな時、大声を出したりしない。腹の下に響くような、低く威厳のある声を出すのだ。その声の圧倒的なオーラのような物の前で声を発しようとする者などいなかった。

「状況報告。」

総隊長は近場の兵士に目をやり言った。

「は……はい！ 報告によりますと、南東方向の見張りに立っていた兵が動く影に気づき」

「発砲されたことで敵兵を目視。銃撃戦となりました。そして……」

……捕獲した敵兵から聞き出した情報なのですが……」

そこで兵士は言いよんだ。

「どうした？」

次の兵士の言葉に場は一時騒然となった。

「先ほどの夜襲は罠で、反乱軍の本軍はこちらに向かっているとのこと……」

「な……。罠だつて!？」

「じゃあここはやばいのか？」

「いや、作戦はどうする!？」

「今受けたらひとたまりもないぞ」

―もう逃げたほうがいいんじゃない？

―それじゃここまで来た意味ないだろ！

兵士たちがざわめく中で総隊長は顔色一つ変えることなく、目を閉じ考え込んでいるように見えた。そしてみんなにこう言い放った。

「現時刻より30分後、作戦を予定どおり開始する。各員は持ち場につけ」

「な………っ」

あまりのことに僕もびっくりした。指定した時間もそうだが、作戦を開始して……

―今の状況をわかってるんですか！？

あとの言葉はみんながつづけたようなものだった。

―30分って……

―ほんとに予定どおりにするのか！？

―ほんきかよ！？

―無茶だ！

そもそもこの作戦は、昼間に仕掛けることで『アレ』の真価を発揮できるのだ。それを夜につて……

「変更はない！もともとはあの都市を奪還するために敵兵をたたきのめすための作戦だ！むしろあつちから仕掛けてくれて手間が省けたようなものだ！グズグズするな！敵に遅れをとられるでないぞ！
！！」

この言葉で決定は決まったのだった

「急すぎるんだよ……」

一人愚痴をこぼしながら調整する。時刻を確認するともう少しで25分になる。

「よし！」

調整が終わった。運び出そう。

「オレも手伝うぜ」

後ろを振り返るとロックがいた。

「第2中隊はお前を手伝えとさ」

ロックの後ろにはもう数名の兵士がいた。彼らの手を借りて何とか運び終える。前線にだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

もう敵兵が目視できるところまで近づいてきている！今、この作戦に参加している国王軍兵士の2倍から3倍はいるのではないか！？

「調整は終わったか？」

「はい！総隊長！」

「ふむ、よろしい・・・・」

それからは沈黙が支配した。結構長い。ゆえに、こちらの緊張感が高まってくる。そしてそれに呼応するかのように敵軍は近づいてくる。兵士もさつきより多くなったような・・・・。早くしなければ数で押し切られてこっちが終わりだ！まだか・・・・まだなのか・・・・

「ユート・ギアハーツよ・・・・」

「！・・・・はい！！！」

「はなて！！！」

ついにきた・・・・。負けるようなことがあつてはならない・・・・。いける・・・・。自分を信じる。

《ユート・ギアハーツ》

《認証シマシタ》

《コアエンジン始動》

《発進シークエンス全テ完了》

さあ・・・行こう

「ゼロ！！起動開始！！！！！！！」

！
」

そして

王国軍、反乱軍で覆い尽くされた大地に

大きく

鈍い銀色で

鉄の鎧の鎧を着た

『人』が立っていた

Operation (後書き)

・・・ゼロの登場シーンはもったかつこよく書きたかった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6989y/>

Resistance for Gear

2011年11月27日16時50分発行